

# ～国際リニアコライダー（ILC）に向けて～

外国人が安心して受診できる医療環境を目指す

平成27年地域政策研究センター(地域提案型・前期) 採択課題

**課題名**：「ILC建設に伴う外国人の医療環境整備へ向けた取組に関する研究」  
**研究代表者**：盛岡短期大学部 教授 石橋敬太郎  
**課題提案者**：岩手県政策地域部科学ILC推進室  
**研究メンバー**：佐々木淳、宮昌隆、佐藤智行（岩手県政策地域部科学ILC推進室）、吉原秋、熊本早苗（盛岡短期大学部）、細越久美子（社会福祉学部）、蛎崎奈津子、アンガホッフア司寿子（看護学部）、  
**技術キーワード**：多文化共生、ILC、医療通訳、外国人向け医療情報、多言語化

## ▼研究の概要（背景・目標）

地域の国際化を推進する上で、本研究では外国人の医療環境の整備に向けた課題の整理及びどのような取組をするべきか具体化を図ることを目的とする。すなわち、岩手県の医療機関が「医療通訳等の拠点整備事業」といった国の制度に該当していない現状を踏まえて、岩手県内に居住する外国人を対象に、在住外国人が求める支援等を明らかにすることを目的とし、ア.医療通訳派遣システム イ.外国人向け医療情報の検討 ウ.医療機関・緊急医療・薬局等の多言語化について焦点化して検討し、課題を整理することとした。

## ▼研究の内容（方法・経過等）

1. 調査対象者は11人で、岩手県ないし日本に5年以上滞在していた。
2. 対象者は、配偶者などの支えがあり、日本での生活及びコミュニケーションにさほど支障のない人たちであった。
3. 2015年12月から2016年2月にかけて、岩手県内に居住する外国人のもとに赴き、直接聞き取りを行い、回答を得た。

## ▼これまで得られた研究の成果

### ア. 医療通訳派遣システムの検討

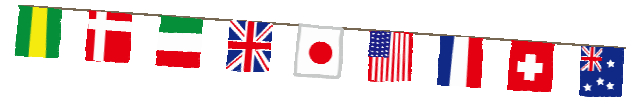
外国語で表記された問診票（図1）を見たことがある、あるいは使ったことがあると回答した外国人は3人と少なかった。また誤診を避けるためには、外国語を話せる医師、看護師が必要であるが、それに代わる体制として、医療の専門分野に詳しいプロの通訳者を病院等に常駐させるか、事前予約で派遣できる体制が望ましい。その際には、患者の求めに応じて、診察室内だけでなく、受付から診察、会計までの一連の過程の間付き添うことが望ましい（図2）。

### イ. 外国人向け医療情報の検討

医師などが患者に対して擬音語を避ける、ゆっくりと話す、紙に書く、病状・治療・処方箋などについて丁寧な説明をするといった言語上の問題を解決することが必要となる。あわせて、外国人のもつ医療文化を医療機関が理解することが重要である。

### ウ. 医療機関・緊急医療・薬局等の多言語化

患者は病院ではなく、ドラッグストアで一般市販薬を購入し、治療する文化であることを認識しなければならない。その対応策の一つとして、多言語対応はもちろんのこと、薬の選択、医師の性別、事前説明の徹底等の配慮がなされることが望ましい。



Forma ng mga Katanungang Pang-medikal Questionnaire Form  
 問診票 (タガログ語版)

Pangalan (名前) \_\_\_\_\_ Tawon (年齢) \_\_\_\_\_ Buwan (月) \_\_\_\_\_ Araw (日) \_\_\_\_\_  
 Kapanganakan (生年月日) \_\_\_\_\_  
 Katarian (性別)  Lalaki (男)  Babae (女)

Tirahan (住所) \_\_\_\_\_  
 Numero ng Telepono (電話番号) \_\_\_\_\_  
 May pang-kalusugang seguro (health insurance) kaba? (健康保険を持っていますか)  Wala (無い)  Meron (有る) Nasunaldad (国籍) \_\_\_\_\_

◆ Napaano po ba kayo? (どうしましたか)  
 May lagnat (熱がある)  Masakit ang ulo (頭痛)  
 Ingay sa tenga (耳鳴り)  Sinisipon (骨节痛)  
 Namadong ibong (鼻づまり)  Naisusuyok ang bibig (口が奥く)  
 Libo (喉痛)  Sumasakit ang lalamunan (のどの痛み)  
 May dugong plema (血痰)  Plema (sipsong sa lalamunan) (痰)  
 Masakit ang dibdib (胸痛)  Mabiko/malakas ang pingit ng puso (心悸)  
 Masikip na sakit sa dibdib (鼻がしめつけられる)  Nahihihipog/humuga (鼻が苦しい)  
 Isang paghinga (息切れ)  Tumutungong paghinga (ぜいぜい/ヒューヒュー)  
 Masakit ang likod (腰痛)  Payosis (Heartburn) (酸やけ)  
 Dighay (げっぷ)  Naduduwal (吐き気)  
 Nag-uusok (嘔吐)

\*Pakinigyan ng marka ang parte lung nanan kilos/masakitmaning sakit (その患所に丸印を付けてください)

図1. 岩手県の多言語問診票(タガログ語版)

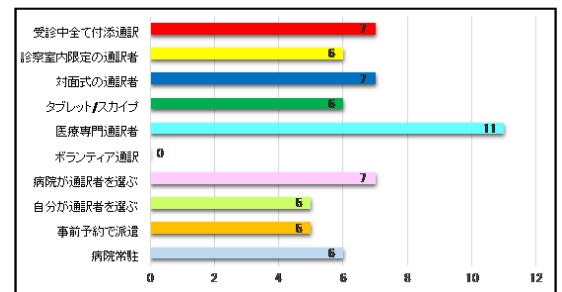


図2. 外国人が希望する医療通訳サービス

## ▼今後の具体的な展開

1. 本調査研究の過程において、外国人女性の出産と夜間や休日の救急対応が多い子どもの受診の際の医療環境の整備は、家族が安心して暮らす上で欠かすことができないことが明らかになった。
2. 子どもの受診には、急を要する対応が検討される状況が予測され、そのため家庭の中での外国人女性の果たす役割が大きく、言葉の問題のほか、医療文化の違いが誤診等を招く機会をはらんでいる。
3. 今後はこれらの課題を解決すべく、外国人女性の出産と子どもの受診に対する医療環境整備のための研究を実施する。

(謝辞) 調査実施に当たり、年度末間際のお忙しいさなか、快く調査研究にご協力して下さった国際交流協会の職員の皆様、ゆうの会の皆様、外国人の皆様から感謝申し上げます。

**課題名** : 岩手の農業を野生獣から守るための遠隔モニタリングシステムの構築  
**研究代表者** : ソフトウェア情報学部 准教授 齊藤義仰  
**課題提案者** : 岩手県八幡平農業改良普及センター 中森 忠義  
**技術キーワード** : 農業、電気柵、遠隔モニタリング

## ▼研究の概要 (背景・目標)

岩手県では、農作物の生産量を増やすため、住民不在の遠隔の山中に、大規模な圃場を求めることが多い。山中には野生獣が住んでおり、毎年深刻な農作物被害がでてい。共同研究者らはこれまでに、電気柵を用いた野生獣対策を行ってきた。また、電気柵の管理および効果検証を行うため、トレイルカメラ(動物の熱を感知し自動で動画撮影するセンサカメラ)で、電気柵の効果を撮影してきた(図1)。しかし、撮影された動画を現地に取りに行ったり、電気柵の状態を見回りにいったりするため、約3時間かかるという管理上の問題があった。そこで本研究では、現地に行かずともトレイルカメラが撮影した動画や、電気柵の稼働状況を確認できるようにする、野生獣対策のための遠隔モニタリングシステムを構築した。

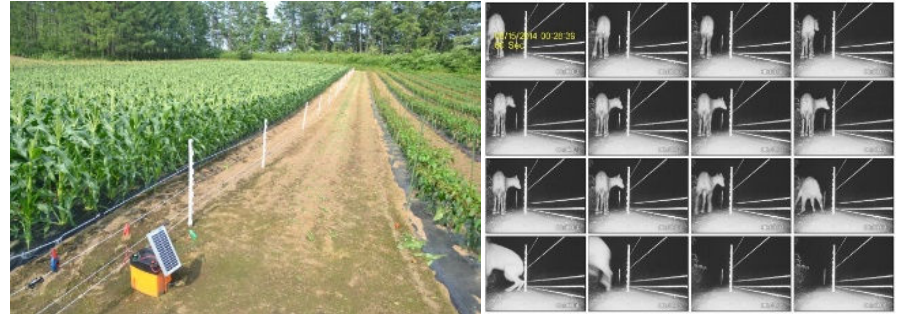


図1: 山中の大規模圃場に設置した電気柵とトレイルカメラで撮影された電気柵に触って逃げる野生獣の動画

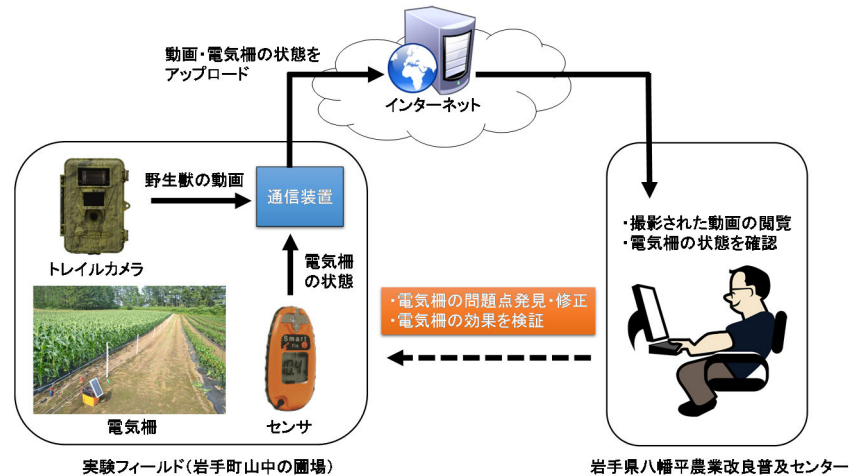


図2: システム設計図

## ▼研究の内容 (方法・経過)

現地に行かずともトレイルカメラが撮影した動画や、電気柵の稼働状況(電圧等)を確認できるようにする、野生獣対策のための遠隔モニタリングシステム構築を試みた。遠隔モニタリングシステムの設計を図2に示す。システムでは、撮影された動画や電気柵の稼働状況を、携帯電話通信網等の長距離無線を用いてインターネット上に保存する。そして、遠隔の八幡平農業改良普及センターから、動画や電気柵の稼働状況を確認できるようにすることで、大幅な省力化を図る。電気柵導入時には、電気柵の問題点を発見し、設置場所の修正や改良を行うことが可能となる。

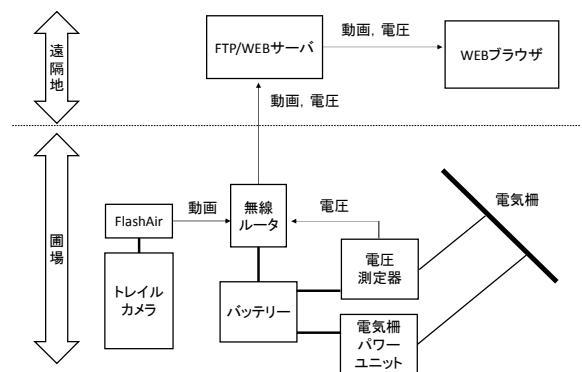


図3: システム構成

## ▼研究の成果 (結論・考察)

実装したシステムの構成を図3に示す。トレイルカメラは市販のものを用い、撮影された動画をインターネット上のサーバにアップロードするため、FlashAirを用いた。Lua言語を用いて、トレイルカメラが野生動物を検知し動作した際に、撮影された動画をアップロードし、ユーザがWebブラウザから一覧表示にて確認・削除できるようにスクリプトを作成した。また、電気柵の電圧を一定時間毎にインターネット上のサーバにアップロードし、Webブラウザから確認できるようにした。

## ▼おわりに (まとめ・今後の展開)

トレイルカメラは、省電力化のためにカメラが撮影している時のみSDカードに電流を流す仕様が問題となった。高速な通信環境では正常に動作するが、低速な通信環境下ではアップロードが終わる前にSDカードへの電力供給が途切れてしまうという問題が起こった。今後は、SDカードに外部から電力供給できる回路を実装し、低速な通信環境下でも動作できるようにし、実際の農場で利用できるようにする。

# ～タブレットとSNSを活用し近隣住民が見守り情報を発信～

平成27年地域政策研究センター（地域提案型・前期）採択課題

課題名 : SNS（ソーシャルネットワーク）活用による公民が連携した地域包括ケア体制の構築  
 研究代表者 : 社会福祉学部 教授 小川晃子  
 課題提案者 : ㈱ワイズマン 小田原浩一・小原伸永  
 研究メンバー : 小柳達也（八戸学院大学）、齋藤建児（東北公益文科大学）、鈴木千紘（北日本医療福祉専門学校）、引屋敷千春（宮古市社会福祉協議会川井センター）  
 キーワード : 見守り、地域包括ケア、SNS（ソーシャルネットワーク）、タブレット

## ▼研究の概要（背景・目標）

地域包括ケアは2025年までを目途として全市町村ごとに進めることになっている。これを背景として、インフォーマルな住民が発信する見守り情報を、社会福祉協議会や地域包括支援センター等のフォーマルな機関の専門職が共有することにより、高齢者の異変対応が迅速かつ的確に図れるようになる可能性を検証した。

## ▼研究の内容（方法・経過）

宮古市川井の箱石地区において、2015年9月から2016年8月までに計9回のワークショップを開催し、気がかりな高齢者の見守り体制をつくった。

ワイズマンの医療・福祉専門職の情報連携のためのアプリMe11+（メルタス）とタブレット活用研修を住民対象に実施した。

6月から9月まで、高齢者10名の見守り情報を8組12名の近隣住民がタブレットから発信し、それを社会福祉協議会が見守りセンターとして共有し、異変がある場合は対応する社会実験を行った。

## ▼研究の成果（結果・考察）

1. ワークショップを重ねることで主体的な見守り体制が構築された
2. 50歳代から70歳代の住民は研修によりタブレットを活用した見守り情報の発信が可能である
3. タブレットとSNS活用による見守り情報発信により、見守り行動と異変把握への気づきが多くなった
4. 住民の気づきが地域包括支援センターに共有され、介護保険サービスの利用につながるなど連携成果がでた。

## ▼おわりに（まとめ・今後の展開）

1. 実証実験は2016年9月まで継続。その後、モデル事例としての検証成果をまとめる。
2. 箱石地区で外部資金の確保等がすでに検討され始めており、持続可能性がある。
3. ご協力いただいた宮古市社会福祉協議会や宮古市職員、及び箱石地区住民の皆さまに感謝申し上げます。

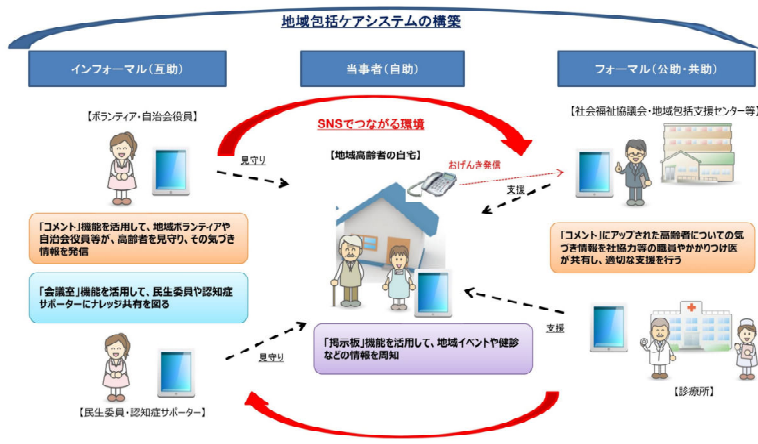


図.本研究で目標とする地域包括ケア体制

表.実証実験の見守り体制

性	見守られる側		SNS等を活用した見守る側	
	年代	プロフィール	投稿数	
女	90代前半	近隣住民3名	68	
男	90代前半	集落会長・民生児童委員2名	1	
女	80代前半		6	
男	80代前半		1	
女	80代後半	ボランティア1名	21	
女	80代前半	地域づくり役員1名	35	
女	70代後半	地域振興センター職員1名	24	
女	80代後半	行政連絡員Ⅰ名	35	
女	70代後半	民生児童委員Ⅰ名	26	
男	80代前半	民生児童委員1名	11	

注)投稿件数は2016年6月1日～8月17日の間の投稿件数  
 投稿にはここに記した見守る側に加えて、社協職員入力と、おげんき発信の結果についての県立大入力が含まれる



# ～野田村十府ヶ浦 海浜植物の再生を目指して～

平成27年度地域政策研究センター(地域提案型・前期)

課題名：十府ヶ浦米田地区海岸防潮堤復旧・整備に係わる海浜植物の保全  
 研究代表者：総合政策学部 准教授 島田直明  
 課題提案者：岩手県北広域振興局土木部 久保寿昌  
 キーワード：東日本大震災、復旧工事、海浜植物再生、野田村十府ヶ浦

## ▼研究の背景・目標

岩手県の北部にある野田村の十府ヶ浦は、砂浜の全長が約2kmと残存する砂浜の中では**岩手県内最大級**であり、**県北を代表する景勝地**の一つである。出現する**海浜植物も多い**砂浜である。

十府ヶ浦の南端にある**米田地区**では、東日本大震災による被災を受け、防潮堤および国道45号をかさ上げして、復旧される。その復旧工事の際、ハマナス群落などの多くの**海浜植物の生育地が消失**することになった。

工事終了後に、**工事前と同じような海浜植物を復元させる**ことが、本研究の大きな目標である。



図1 工事前の十府ヶ浦米田地区の空中写真  
 現地保全区・仮移植区を追加した

## ▼保全対策(方法および結果)

### 1. 現地**保全区**の設定(図1の緑丸)

約10×15mの保全区を2か所設定した(写真1)。モニタリング調査の結果、種の欠落もなかった。

### 2. **仮移植**(図1の黄色の範囲)

海浜植物の根茎や種子を含む表層の砂を近隣地に仮移植した(写真2)。工事終了後にもとの砂浜に移植する。もともと生育していた種が概ね確認でき、植被率60～80%と広く海浜植物に覆われていた。

### 3. 現地採取した種子からの**苗づくり**

ハマベンケイソウなどは安定した苗づくりが可能となったが、ナミキソウなど一部発芽率が高くないものも見られた。次年度も条件を変え、実験を続けている。

### 4. **系外**での根茎の移植

現地から離れたところ(岩手県立大学および盛岡農業高校)で根茎の保存を行った。プランターで保存しているものは旺盛な成長を始めた。



写真1 保全地の様子  
 (2015年5月)



写真2 仮移植地の様子  
 (2015年9月)



写真3 盛岡農業高校の生徒とともに行った種子の播種  
 (2015年6月)



写真3 大学の畑に仮移植したハマベンケイソウ  
 (2015年5月)

## ▼おわりに

1. 本研究で得られた成果をモデルとして、**山田町船越海岸**においても海浜植物の保全活動がおこなわれることになった。
2. 今後は**2017年度の工事終了後**を目指して、**苗の増産、復元方法の検討**が課題となる。
3. 活動はFacebook(十府ヶ浦・海浜植物のお引越しレポート)で報告を続けるので、そちらを確認ください。



十府ヶ浦の保全活動については、この本に記載した。

課題名 : 岩手県立図書館震災関連資料デジタルアーカイブズの利活用のあり方に関する研究  
 研究代表者 : ソフトウェア情報学部 講師 富澤浩樹  
 課題提案者 : 岩手県立図書館  
 研究メンバー : 伊東清勝(岩手県立図書館)、安保和徳(岩手県立図書館)、阿部昭博(ソフトウェア情報学部)  
 キーワード : 震災復興、震災関連資料、デジタルアーカイブズ、情報システム

### ▼研究の概要(背景・目標)

岩手県立図書館「震災関連資料コーナー」の利用活性のために試作した震災関連資料デジタルアーカイブシステム(以下、試作システム)について、その利活用場面に着目した研究を実施した(図1)。試作システムを通して、震災関連資料を支援するシステムのあり方について検討することが目的である。具体的な目標は以下の通り。

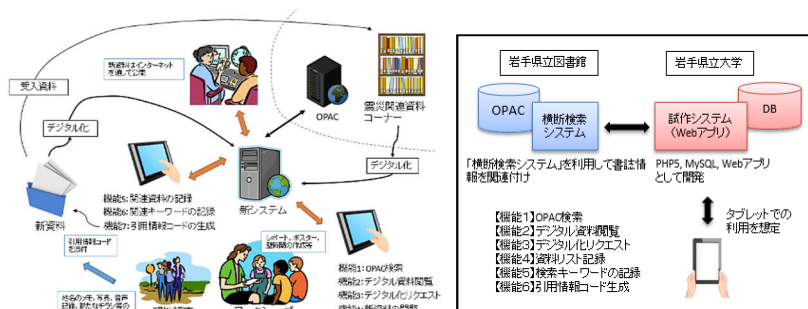


図1 基本コンセプトと試作システムの構成[1]

- 【目標Ⅰ】 試験的運用(ワークショップ、現地取材)に基づいた試作システムの改善、
- 【目標Ⅱ】 震災関連資料を用いた運用プログラムの計画・実施、
- 【目標Ⅲ】 試作システムを用いた資料の利活用のあり方に関する検討、

### ▼研究の内容(方法・経過)

【岩手県立図書館】は、業務知識の提供、知り得た関連情報の提供、試作システムの評価等に協力する。  
 【岩手県立大学】は、資料の利活用場面を想定したワークショップや現地取材を試験的に実施し、ICT環境の評価及び改善を行う。

### ▼研究の成果(結論・考察)

#### 1. 新聞見出し情報に基づく検索想起支援機能の研究開発(図2)

評価では利便性に関する課題が指摘された一方で、「図書館では用意できないキーワードが含まれている」「キーワードから当時を思い出せる」といった肯定的意見が多く聴かれ、著者らの観察でもキーワードに悩む様子なく検索する参加者の様子がうかがえており、本検索支援の有用性が確認された。

#### 2. 現地取材を伴う運用プログラムの開発と試行(図3)

昨年度要望が多かった現地取材(被災施設の見学(広域総合交流促進施設「シートピアなあと」「浄土ヶ浜レストハウス」)、住民へのインタビュー(宮古市藤原地区)、震災ガイド「学ぶ防災」への参加)を加えた運用プログラムを開発、試行した。アンケートより、各回の満足度は極めて高かった。また、複数日に及ぶ運用プログラムが実施可能であることも示された。

#### 3. 試作システムを用いた資料の利活用の在り方に関する検討

試行した運用プログラムは、多様な参加者の興味・関心を引き出すことができた。現場と資料を関連させた運用プログラムは、資料の利活用活性に有用であることが示唆されており、一定の方向性を導き出すことができた。と考える。

#### 結果1: 新聞見出しに基づく検索キーワード想起機能

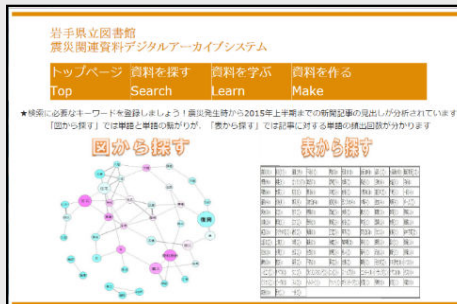


図2 試作システムの画面例

利用者の興味・関心からキーワードを想起させるための検索支援機能を研究開発した。情報源は利用者が目にする機会が多いと考えられる新聞メディアを対象とした(岩手日報「特集3. 11東日本震災一立ち上がり岩手」の3537件分の見出し情報(2011.3～2015.6掲載分)が中心)。これらをテキストマイニングした結果を図表にして用いた。

#### 結果2: 現地取材を伴う運用プログラムの開発と試行



図3 岩手県宮古市での現地取材(左)と最終発表会(右)の様子

各回3時間(現地取材は1日)、全4回のワークショップ(11/25(趣旨説明と試作システムの試用)、12/12(宮古市現地取材)、1/16(振り返り、新資料の作成)、2/7(発表))には、公募に応じた市民と震災学習に関心のある学生の述べ14名が参加した。

### ▼おわりに(まとめ・今後の展開)

【研究の成果】より、上記の【目標Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ】は達成されたといえる。今後の課題は、運用プログラムのバリエーションの検討・開発・充実とそれに伴う試作システムの改善である。本研究は「復興局主導で構築されるアーカイブと別観点からの取り組みであり、将来的に連携可能性がある」との評価を受けており、関連アーカイブとの連携可能性についても検討していく。

# 津波をくつがえす ～岩手おらほのおなごたち～

平成27年度地域政策研究センター(地域提案型・前期)

課題名：「歴史に学ぶ“女性と復興”～昭和三陸大津波と家族・共同体」総集編  
研究代表者：宮古短期大学部教授 植田眞弘  
課題提案者：岩手女性史を紡ぐ会  
研究メンバー：伊藤エミ子、植田朱美、柴田温子、長谷川美智子、花坂清美、星卫ツ子、山口照子(岩手女性史を紡ぐ会)  
研究協力者：竹村祥子(岩手大学人文社会科学部)、桐座久子(ウイメンズスペース富山フェミニストカウンセラー)、柳原恵(お茶の水女子大学基幹研究員)

## ▼研究の経過

- ①平成24年度課題名「歴史に学ぶ“女性と復興～昭和三陸大津波と家族・共同体”
- ②平成25年度課題名「続・歴史に学ぶ“女性と復興”～昭和三陸大津波と家族・共同体」
- ③平成27年度、「津波をくつがえす～岩手おらほのおなごたち」(岩手女性史を紡ぐ会・会誌)として小冊子を作成。

## ▼研究の概要

本研究では、水産業を生業とすることによって形成されてきた岩手県沿岸地域の家族・共同体のなかにあつて、地域の女性たちが昭和三陸大津波と復旧・復興過程、さらにその後の戦時体制に突入していく過酷な社会状況のなかで、どのような困難に見舞われたのか、さらに、それらの困難にどのように立ち向かっていったのかを、主に直接その時代を体験した女性たちに聞き取りを実施して纏めたものである。なお、本研究は昭和三陸大津波とその後を浮き彫りにして東日本大震災津波からの復旧・復興における教訓を得ることを目指したものである。

## ▼今後の取組み

平成28年度「三陸で生きぬいて～岩手おらほのおなごたち～」(聞き取り集)を刊行予定。

## ▼献辞と謝辞

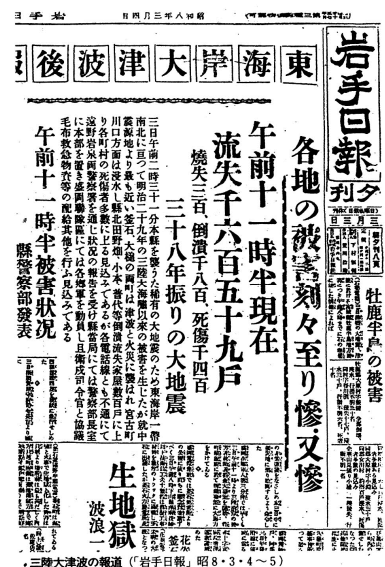
語り手6名の故人のご冥福をお祈りするとともに御遺族のご協力に心から感謝申し上げます。

2015年度岩手県立大学地域協働研究

## 津波をくつがえす ～岩手おらほのおなごたち～



岩手女性史を紡ぐ会  
2016年3月



大津波三陸沿岸を襲う

牡鹿半島の被害

三陸大津波の報道(「岩手日報」昭8・3・4～5)

# ～「街に出る」盛岡市動物公園を目指して～

平成27年地域政策研究センター(地域提案型・前期) 採択課題

課題名：動物公園から発信する市民や地域との協働による都市形成と市民活力の向上  
研究代表者：総合政策学部 教授 倉原宗孝  
課題提案者：盛岡市動物公園公社 園長 辻本恒徳／盛岡市公園みどり課 主査 長澤幸多  
研究メンバー：川村弘樹(盛岡市動物公園公社) 藤根卓夫(盛岡市公園みどり課)  
技術キーワード：動物園 市民活力 盛岡 協働

## ▼研究の概要(背景・目標)

盛岡市動物公園は平成元年開園から多くの市民県民はじめ県内外の観光客から親しまれてきた。一方で、市の厳しい財政状況のなか、動物公園の運営費などの財政的負担が問題となっている。本年度は、前年度に取り組んだ研究活動の成果をさらに発展させ、動物公園のハード・ソフトの検討と共に、「街に出る動物園」を一つのテーマに市民・関係者各主体と検討を重ねた。またその間、国の支援事業に採択されるなどの新しい動きも生まれてきた。これらの状況を睨みながら、魅力的な動物園の今後に向けた市民各主体との新たなアクションの検討を重ねた。

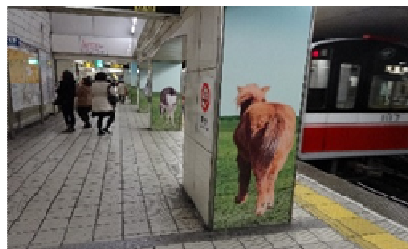
## ▼研究の内容(方法・経過)

一つは前年度に引き続き先進的な事例の情報収集を重ねた(特に商業ベースでもどん欲な活動・運営をしている点を注視した)。また、動物園の運営に向けて市民各主体が協働する体制作りを狙いつつ、「街に出る動物園」のテーマを実現するための検討を重ねた。なお、研究期間に国土交通省支援事業において盛岡動物公園の再生を目指した「盛岡市動物公園の官民連携による再活性化事業調査」が採択され、財政的に厳しい公園整備を検討する上で大きな糧となった。結果的にPPP・PFIなど官民連携の手法を模索する点で動物公園が一つの有効なモデルとなり得るため行政内部の各セクションとの連携を促進する作用も見られた。

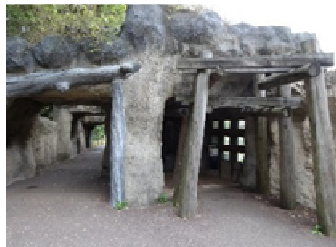
## ▼研究の成果

### 【全国先進事例の情報収集】

前年度に続き全国事例の視察・情報収集を進めた。これまでの研究から西日本に有効な対象が多いこと、また公共施設としてだけでなく今後の園運営においては娯楽提供の要素を積極的に取り込んでいく必要性などから情報を収集した。盛岡市とは都市規模が異なる面もあるが、各事例では、街中に存在し、その中で特に娯楽要素を取り込むことに力を入れており、来園者は楽しみながら生態に触れ、また園の経営にも効果を上げているようだ。



【天王寺動物園】動物園に向かうまでのアクセスも愉しく分りやすい工夫が多い(左)。園周辺の高層ビルと動物のコントラストも面白い(右)。



【福岡市動物園】一般車道を跨ぐように園内が配置、傾斜地の利用と共に工夫がある。都市部立地を活かす設計が見られる(左)。入園者の通路もアスレチック風な設え(右)。

### 【市民・各主体が協働する検討作業】

前年度の市民を中心とした参加者層に加えて、行政、企業など新しい主体の参加議論が展開された。また各施設との連携体制も模索され始めた。その中で企業ノウハウも導入したより現実的な動物公園の運営検討が展開した。一方で市民はじめ動物愛好者達の自由な発想・考えも提示・共有された。こうした市民・各主体がそれぞれの立場から緩やかに協働し合う関係・場が醸成していることが動物公園運営と共に広く盛岡の今後のまちづくりを睨む上で力となる。



今年度は現状説明や展開方法の検討が主にセミナー方式で進められた。現状報告では、行政担当者のこれまでの苦勞も提示されると共に今後への期待が共有された。

また今年度のテーマの一つである「街に出る動物園」の実践に向けた議論も展開した。ここでは商店街関係者などが積極的に参加し、動物公園、商店街の各関係者をはじめより実践に向けた、盛岡らしいアイディア・意見交換がされた。



(商店街と動物園の検討会)これまで接点が多かったそれぞれだが実際に意見交換してみると非常に好意的で、ユニーク・建設的な意見・アイディアが繰り出された。

## ▼おわりに(まとめ・今後の展開)

研究期間後になるが、「街に出る動物園」のコンセプトとアイディアは、早速本年5月のゴールデンウィークに肴町商店街を舞台にして実施された。動物達の写真やゲートは子ども達はじめ商店街来客者にも好評だったようだ。また同様の企画は、他の商店街や施設・空間も活用して今後も夏期などにさらに充実して実施予定である。さらに各支援事業や企業・シンクタンクとの共同作業も今後が期待できる課題である。引き続き各調整も図り具体的な効果的な取り組みに向かっていく予定である。

# ～おらほの町をどやしていくべ?～ (わが町をどうしていこうか)

平成27年地域政策研究センター(地域提案型・前期) 採択課題

課題名 : 住民参加型包括ケアシステム確立に関する研究の検討～  
研究代表者 : 看護学部 教授 上林美保子  
課題提案者 : 軽米町健康福祉課 内城良子  
研究メンバー : 田代沙織、川原木純二、他(軽米町)、藤村史穂子(看護学部)  
キーワード : 介護予防 地域コミュニティ 自助・互助・共助

## ▼研究の概要(背景・目的)

日本の高齢化率は平成25年に25.1%であったが平成37年(2025年)には30.3%に達する一方、高齢者を支える生産年齢人口は減少し続け、平成37年には1人の高齢者を1.9人で支えなければならなくなると予測されている。現在人口約1万人の軽米町は住民の1/3強が高齢者であり、独居高齢者の増加や老老介護、要介護者の増加に伴う介護保険料の引き上げなどの課題が山積している。そこで、平成27年1月に実施した「暮らしと介護予防に関する調査」を分析し、軽米町の今後の地域包括ケアの方向性とそのための具体策をさぐることを目的とした。

## ▼研究の内容(方法・経過)

以下の2つの方法により調査を実施した。

### 【調査1】暮らしと介護予防に関する調査の分析

軽米町に在住する高齢者等計3,744人(65歳以上高齢者3,676人、40～64歳の要介護認定者17人、65歳未満で身体障害者手帳1級2級取得者51人)に対し、「日常生活圏域ニーズ調査 調査票(厚生労働省)」を参考に軽米町健康福祉課で自作した調査票を平成27年1～3月に行政連絡区長を通じて、介護予防事業利用者は事業を通じて配布・回収した。調査内容は、年齢、性別、家族構成、主な病気、要介護度、日常生活の状況(住まい、生活行動、外出、地域活動への参加)、認知機能等である。町全体について単純集計し、一部、3小学校区に分け集計、分析した。

### 【調査2】ふれあい共食事業交流会での意見聴取

ふれあい共食事業交流会の参加者16人全体に対し調査1の結果を説明後、4グループに分れ、結果から感じたこと、考えたこと、共食事業との関連で感じたこと等、自由に話し合ってもらった。出された内容を類似した内容ごと

に分類した。

ふれあい共食事業とは、高齢者同士の交流と介護予防プログラム(運動、口腔、栄養)を行い、健康増進を図るとともに要介護状態を予防して高齢者が元気で長く生活を送ることができることを目的に町内14地区で開催している。

交流会では、各地域でふれあい共食事業を開催している関係者が、親睦交流を深めて地域活動を促進につなげるための会である。



↑ふれあい共食事業の様子



←ふれあい共食事業交流会の様子

## ▼研究の成果(結論・考察)

### 【調査1】暮らしと介護予防に関する調査の分析結果

・3,386部回収(回収率90.4%)、3,011部を分析対象(有効回答率80.4%)。65～74歳の前期高齢者が4割、75歳以上の後期高齢者が5割で、男性4割、女性6割。1人暮らしが1割、家族と同居が8割で、日中一人になることは「よくある」3割、「たまにある」4割、「ない」2割。  
・要介護認定を受けている1割、認定を受けていないのが8割。自分の健康状態は「よい」「まあよい」あわせて3割、「ふつう」5割、「あまりよくない」「よくない」あわせて2割。治療中の疾患を持っている人が多く、高血圧が4割。普段の生活で介護が必要なのは6割、誰かの介護・介助が必要なのは2割弱。主介護者は配偶者、娘、息子の順。生活するために必要な支援内容は買い物、食事の支度、掃除洗濯の順。  
・介護予防事業の対象外3割、対象に該当5割強。認知症予防、うつ予防、運動器の機能向上の順。週1回以上の外出ありが7割、外出なし2割。昨年比で外出頻度が減った人は3割。減った理由は足腰の痛み、交通機関が不便、トイレの心配、外での楽しみがない、経済的に出られないの順。地域活動への参加は、参加していないが半数。参加している活動は、自治会・町内会、祭り・行事、趣味関係、老人クラブの順。

### 【調査2】ふれあい共食事業交流会での意見は右記のとおり

## ▼おわりに

・課題の可視化が図られ、町の地区組織を通じて対策の方向性が明確となった。  
・今後課題を共有するため調査結果を町民への普及を図る予定となっている。





# ～まぶりっと（見守り者）たちの挑戦～

平成27年地域政策研究センター（地域提案型・前期）採択課題

課題名：過疎地における住民主体の見守り体制づくり  
研究代表者：社会福祉学部 教授 小川晃子  
課題提案者：特定非営利活動法人かわい元気社 横道廣吉  
研究メンバー：小柳達也（八戸学院大学）、齋藤建児（東北公益文科大学）、鈴木千紘（北日本医療福祉専門学校）、真田淳（宮古市社会福祉協議会川井センター）  
キーワード：見守り、過疎地、住民主体、アクションリサーチ

## ▼研究の概要（背景・目標）

宮古市川井地区（旧川井村）は、過疎化・高齢化が進んでいる。能動的な安否発信である「おげんき発信」が普及しているが、認知症等により自己発信ができなくなる高齢者も増加している。見守りと生活支援体制の再構築を住民とともに取り組んだ。

## ▼研究の内容（方法・経過）

宮古市社会福祉協議会川井センターとともに、地域に介入しながら問題解決を図るアクションリサーチを行った。

2015年5月に、地区内の全民生児童委員を対象とする調査を実施し、その結果をもとにワークショップで見守り体制再構築の合意を形成した。

川井・小国・箱石の3地区ごとにワークショップを開催し（表参照）、民生児童委員・行政連絡員・自治会役員・消防団・郵便局職員等で見守り体制づくりを検討し、取り組んだ。

NPO法人かわい元気社では、スマホ・タブレットの研修を行い、見守り者の育成を行った。

## ▼研究の成果（結果・考察）

本研究の介入により、川井地区の住民主体の見守り体制の再構築が、地域特性に応じて進んだ。

川井地区では、福祉マップづくり（写真参照）に取り組み、見守り体制と課題を可視化した。今後は、1年に1・2回、「まぶりっと会議」を開催することになった。

箱石地区では、地域づくり委員会が主体となって、タブレットとSNSを活用した見守り情報の発信と共有に取り組むことを合意し、研修と実践を行った（小川の別稿参照）。

小国地区では、今後の取り組みが課題である。

## ▼おわりに（まとめ・今後の展開）

- アクションリサーチにより川井と箱石地区では住民主体の見守り体制再構築が進んだが、小国地区では今後の取り組みが課題である。
- ご協力いただいた宮古市社会福祉協議会・宮古市・かわい元気社・郵便局等の職員の皆様、及び民生児童委員・行政連絡員・地域づくり委員会・消防団・ボランティア等の川井地区住民の皆様に、厚く御礼申し上げます。

表.ワークショップの開催状況

日時	地区	内容・結果	参加者数
2015.06.19	旧川井村全域	ワールドカフェ方式のWS. 全民生児童委員を対象として、調査結果を提示し、見守り体制について小地域ごとの検討を進めることへの合意を形成	24名
09.04	小国	小国地区での見守りに関するWS. 参加者少なく再度開催が必要。江繋地区は別開催も要検討。	8名
09.10	川井	気がかりな人が増えている現状が語られ、次回はその把握のために「福祉マップづくり」実施を合意。	12名
10.19	川井	福祉マップづくり	13名
2016.01.26	川井	第一回まぶりっと会議 マップづくりを含めて同様の取り組みを1年に1～2回実施することで合意。	
10.16	箱石	気がかりな人の情報交換について合意。地域づくり委員会を主体として、再度話しあいをすることに。	12名
11.25	箱石	地域づくり委員会主催として初会合。箱石地区における他者見守りの必要性和タブレットを活用した見守りの試行に合意を形成。	16名



写真. 川井地区での福祉マップづくり

# ～漆でつながる現在・過去・未来—八幡平市斎藤家古文書を通して～

## 平成27年地域政策研究センター(地域提案型・前期) 採択課題

**課題名** : 地域文化資源(漆器問屋史料と漆器業)を核とする地域振興に向けての基礎的研究  
**研究代表者** : 盛岡短期大学部 准教授 三須田善暢  
**課題提案者** : 八幡平市教育委員会  
**研究メンバー** : 林雅秀(山形大学)、高橋正也(東北活性化研究センター)、外崎理紗(八幡平市博物館)、長谷部陽(東北大学)、石沢真貴(秋田大学)、庄司知恵子(社会福祉学部)  
**技術キーワード** : 漆器・古文書・大屋斎藤家・地域振興・八幡平市

## 研究の概要

本研究は八幡平市における地域文化資源(漆器問屋史料と漆器業)を核とする地域振興に向けての基礎的研究とし、以下3点の作業に取り組んだ。

- (1) 八幡平市石神・大屋斎藤家の文書の撮影・整理・保管・分析
- (2) 斎藤家の漆器生産の様子の解明
- (3) 地元漆器業(安比塗)・関連業との連携、斎藤家文書らの文化資源と地域振興との結びつきの模索

【大屋斎藤家】斎藤家は、社会学・民俗学・社会人類学上貴重な調査対象であり、戦前期に渋沢敬三主宰のアチックミュージアムによる共同調査の対象となった。斎藤家は、「大屋(オオヤ)」という屋号をもち、「名子(ナゴ)」(大屋と強く結びついた農民)を含めた大家族制度を保持していた家であり、漆器問屋でもあった。有賀喜左衛門によるモノグラフ『南部二戸郡石神村に於ける大家族制度と名子制度』(1939)における名子制度の分析は、日本社会の基礎構造たる「同族団理論」を明らかにしたものと今日でも高い評価を与えられている。しかしこれまでその史料については一部を除き公表されることがなく、当該史料が散逸しつつあった。また、関連する研究をみても、当該地域における漆器業に関する分析が弱く、地域としても学界としても資・史料の整理・保管・分析が求められている状況にある。

## 研究の内容

主な研究内容は、以下5点である。

- (1) 資料の写真撮影、目録作成、解説・分析作業。
- (2) 既存の研究の整理と比較対象となる漆器業産地(秋田・川連地区)の調査(継続中)。
- (3) 当該地域と関係の深い郷土史家(矢萩昭二氏・工藤利悦氏)と学習会の開催。
- (4) 2015年11月7日の第63回日本村落研究学会大会、11月21日の市場史研究会2015年秋季大会にて報告。
- (5) 以上作業を踏まえたシンポジウムの開催(2016年3月4日『安比塗と文化資源を考える』於：八幡平市博物館)

## 研究の結果

- 結果(1) : デジタルカメラにより現存する斎藤家史料をほぼ撮影した(撮影枚数17059枚:写真1)  
 →散逸防止と公共的利用への一歩を踏み出すことが出来た。
- 結果(2) : 目録を作成しつつ(表1)、書簡類および大福帳の一部は分析を行っている\*  
 →漆器業に関する染料や木地の取引だけではなく、酒屋・馬産など多様な商売を複合的にやっている。
- 結果(3) : 八幡平市博物館との連携によるシンポジウム「安比塗と文化資源を考える」の開催。  
 →研究者、博物館、工芸家、販売者それぞれの情報共有とネットワーク形成ができた(「おわりに」参照)。



写真1

\*解説の過程で、有賀が調査時に当時の当主斎藤善助と頻りにやり取りした書簡が見つかり、学界上の重要性を鑑みて全体に先駆けて翻刻をおこなった\*。そこから、有賀のモノグラフが斎藤氏、佐藤氏との綿密なやり取りから生れたことが明らかになった。調査方法としても面白い視点である。  
 ※三須田他 2016 「石神大屋斎藤家所蔵有賀喜左衛門関係書簡類」『岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集』(18)、1-20。

写真1は撮影した一部資料である。左奥に見える冊子体のものは「大福帳」といい、斎藤家における当時の取引を示した資料であり、漆器にかかわる取引内容も確認できる。他にも、紙片一枚もの資料がたくさん存在する。写真2は民藝運動家の柳宗悦らが、積雪地方農村経済調査所との関係で石神を訪れて漆器生産を視察した際の色紙である。柳らは、当時の農村疲弊を改善するために農家副業としての工芸品の製造・販売に力を注いでいた。写真3は文化5年に斎藤家において作成された漆器であり、そのレベルの高さがうかがえる。これらの関連を分析していくとは、現在の漆器業振興に寄与する一助となると考える。

表1: 作成目録(一部)

資料番号	資料名	内容	西暦	年月日	差出	受取	備考
斎1	官地株系探原書	株の刈り取りについてか?	1881	明治14年9月			47名の署名あり 表面に鉛筆で牧野整理についての日程がある
斎2	神宮大麻と厨について						
斎3	牧野整理補助金	補助金の内訳		明治■年1月15日			裏にも書き込みあり
斎4	牧野関係の費用	費用の内訳		明治■年9月29日-30日			裏にも書き込みあり
斎5	〃	〃		明治■年9月29日-10月1日			
斎6	昭和7年度生草払下請入費(昭和10)年度国有地放牧料割出台帳	探原関係の費用・馬調べなど 各種費用、個人別の費用	1932				
斎7	委任状	国有林雑立木買受申込・締結に関して	1935				
斎8	奨励金交付状		1932	昭和7年3月31日	農林省畜産局長	斎藤善助	種牡馬について 種牡馬飼養の奨励金、50円交付
斎10	種牡馬飼養奨励金交付状		1932	昭和7年3月31日	農林大臣	斎藤善助	

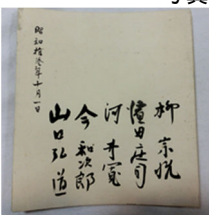


写真2



写真3

## おわりに

今後収集した史料の分析を進めることが第一であり、そこで発見された知見を公表し、漆器業の振興に結びつけていきたい。おそらく手法は多々あるが、継続的な取り組みが必要だと思われる。とはいうものの、緊急性を帯びた面もある。たとえば、漆器を乾燥させる室(ムロ)は、現在八幡平市にはわずか1つしか残っておらず、しかもそれも崩壊の危機にある。その保存作業には金銭的な問題もあるが、応急措置として3D技術の活用もありうることを、シンポジウム当日にフロアーにいた県立大の職員から指摘された。多方面の方との連携で新しい道を見出していきたいと思う。

# ～八幡平市における地域社会・職場の女性の参画～

平成27年地域政策研究センター(地域提案型・前期) 採択課題

課題名 : 地域社会における女性の意思決定場面への参画に関する研究  
研究代表者 : 総合政策学部 教授 吉野英岐  
課題提案者 : 八幡平市  
研究メンバー : 高橋潤、泉山美穂(八幡平市地域振興課)  
キーワード : 男女共同参画、地域社会、企業団体、意思決定場面

## ▼研究の概要(背景・目標)

今日、地域社会や企業団体において意思決定場面への女性の登用は十分には進んでいない。本研究は八幡平市における男女共同参画社会の実現に向けて、地域社会や職場で男女が共に活躍できる環境の整備や意識の改革について、実態と課題を明らかにする。



企業への聞き取り調査



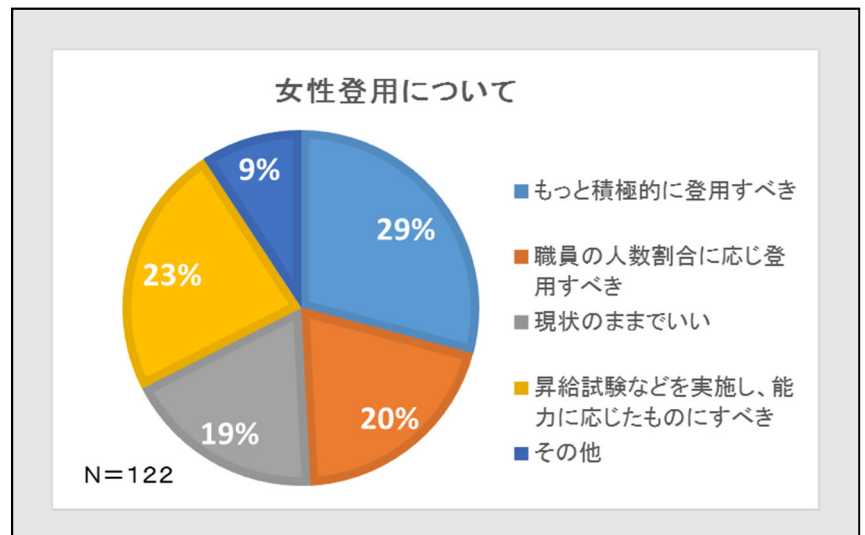
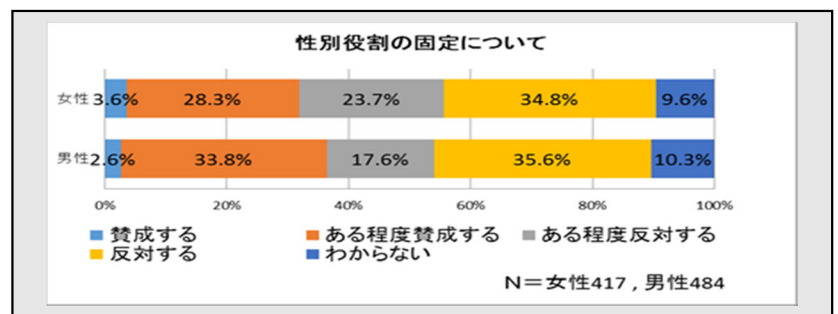
地域社会でのワークショップ

## ▼研究の内容(方法・経過)

1. 八幡平市の住民3140名を対象にした男女共同参画に関するアンケート
2. 市内の企業団体200社を対象にした就業場面に関するアンケート
3. 市内の3つ地域振興協議会の役員等を対象にしたワークショップ
4. 4つの企業団体を対象とした聞き取り調査

## ▼研究の成果(結論・考察)

1. 性別役割を固定する考え方については男女とも否定的な回答が4割以上を占めている。
2. 企業団体の管理職は、「すべて男性」が53%、複数の女性管理職のいる割合は10%である。今後の女性の登用については、「現状のままでいい」は19%と比較的少なく、「もっと積極的に登用すべき」という意見が29%とほぼ3割に達している。



## ▼おわりに(まとめ・今後の展開)

1. 意識の変化はみられるが、意思決定場面への女性の参画はまだ十分でない。
2. 若い世代の女性に意識の変化の兆しはあるが、家事育児介護などの面で、女性をとりまく生活環境が整っておらず、現状では参画した場合は女性の負担が増えることが懸念されている。
3. 身近な生活環境を改善していくために、地域協議会で意見交換の場を積極的に作っていく必要がある。
4. 職場では、経営者層の意識改革および女性職員への研修や訓練の機会の充実が必要で、そのための行政支援の強化が望まれる。

# ～スマホ片手に植物ハンティング～

平成27年地域政策研究センター(地域提案型・前期) 採択課題

課題名 : 市民参加による植物分布調査を中心とした博物館機能の向上  
研究代表者 : 総合政策学部 教授 平塚 明  
課題提案者 : 釜石市郷土資料館 館長 菊池清太  
研究メンバー : 阿部 里紗 (NPO法人 Asia Environmental Alliance)  
技術キーワード : 携帯端末、位置情報、マッピング、市民参加

## ▼研究の概要(背景・目標)

地域博物館の活性化を図るため、スマートフォンを用いた市民参加型植物分布調査を実施した。従来の類似手法のほとんどが失敗していることを踏まえ、システムは極力シンプルにした。ゲームの要素も取り入れて参加者のモチベーションや連帯感を高める仕組みに配慮した。この試みで維持された継続的な博物館の利用が、自発的な市民グループの誕生を促すことが、最終目標である。

## ▼研究の内容(方法・経過)

手法の異なる2種類のワークショップを実施した。

1. 植物ハンター。本研究のために、シンプルな画像情報システムを開発した(The Mapper、開発者: ソフトウェア情報学部 吉田尚平)。子どもたちが中心の参加者は市内を歩きながら、各人が与えられた課題(たとえば「赤い花や実を持つ植物」)にしたがって植物を探し、携帯端末(スマートフォンやタブレット)のカメラで撮影した後、The Mapperのサイトに送信した。撮影画像にはGPS情報がタグづけられており、直ちにマップ画面に配置された。マップは移動中の参加者も随時、携帯端末で見ることができた。館に待機したスタッフは、アップされた画像から種(しゅ)の同定を迅速におこなった。撮影した植物の種名がすぐに判明するという仕組みが、参加者の満足度を高めた。

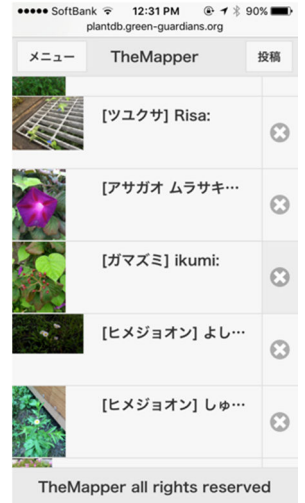
2. 地元の植物専門家(鈴木弘文氏)による解説付き野外植物観察および標本作りワークショップ。このワークショップから、新たに市民グループが発足した。

## ▼研究の成果(結論・考察)

自分が撮影した植物画像が直ちにマップに現れる(可視化)、課題に沿ったものが蓄積される(ポイント制)、自分ではわからない植物名が素早くわかる(報償)というゲーム的要素があったため、参加者は熱心に取り組んだ。そのため、イベント実施日以降も撮影画像の投稿が相次いだ。釜石市以外からの参加者がその居住地に戻って画像を送信してきた例もあった。スタッフは同定や対応に追われたが、この仕組みが参加者を強く惹きつけていることがわかった。市民参加型生物調査(スマートフォンによる植物マップ作りのシステム)が、極めて有効であることが確かめられた。



植物ハンターが撮影した画像は、携帯端末の画面のマップに現れ、確認することができる。



控えていたスタッフが画像から同定した植物名が、即座に画面に現れる。画像の横には植物名とハンターのニックネーム。



ワークショップをきっかけに復活した釜石植物の会。2015年10月18日の再開第一回では、大槌町須賀町の湿地で植物観察をおこなった。

## ▼おわりに(まとめ・今後の展開)

情報システムだけではなく、随時、種を同定し、参加者の質問にスタッフが答えるという「人手をかけたサービス」が重要だった。ただし、この企画の参加者は若年層に偏っていた。一方、植物観察会や標本作りに参加したのは高齢者だけだった。植物観察会の参加者からは、もっと多くの植物を見て回り、釜石の植物について知りたいという声が聞かれた。その結果、鈴木弘文氏がかつて会長として主宰し、長く休眠状態にあった「釜石植物の会」が再び活動を始めることになった。これが本研究の最大の成果である。今後は植物ハンターによって集積した植物分布情報を、館の展示内容に加えたい。また、「釜石植物の会」の継続のために別の研究助成に応募したところ、採択された。



あなたも試してみませんか? 左のQRコードを読み取って、The Mapperにアクセス→「名前を入力してください」→名前を入力する(筆名でも何でも可)→「完了」→「設定」→「情報を投稿する」→「ファイルを選択」→「写真を撮る」→実際に撮ってみる→「現在位置から選択」→「OK」→「送信する」。「投稿が完了しました」と表示されたら、→「地図を確認する」→あなたの撮影した画像がマップ上に配置されているはずです。

(なお、今回、種名同定サービスはありません。^\_^)

# ～結び・拓き・育まれる＜馬事文化＞へ～

平成27年地域政策研究センター(地域提案型・前期) 採択課題

課題名：岩手の馬事文化の継承と馬事文化に係る資源の利活用に係る調査研究  
研究代表者：総合政策学部 教授 倉原宗孝  
課題提案者：岩手県農林水産部競馬改革推進室 推進監 千葉義郎  
研究メンバー：佐藤学（岩手県競馬改革推進室）高橋幸宏（同）村田忠之（岩手県畜産課）  
加藤俊男（盛岡市観光課）  
技術キーワード：馬事文化 馬 産業 芸能

## ▼研究の背景・目標

馬産地として知られる岩手県においては多様な馬事文化が存在する。チャグチャグ馬コをはじめ馬事文化には文化・芸能・観光・教育等の多様な要素が含まれ貴重な存在である。しかしながら近年、その主役である馬の減少が著しく、各地の馬事文化の継承が難しくなっている現状がある。こうした中で本研究は、関係者からのヒヤリングや事例、各種データの収集を通じて、貴重な馬事文化の継承に向けた現状・課題・方策を考えていく。

## ▼本県の馬産業、馬事文化の状況

本県では馬を利用する祭事が多いが、いずれも参加する馬の確保に腐心している。これらの祭事はもともと愛馬の無病息災を祈って行われたものであるが、馬の飼養頭数が減少すれば行事に参加する馬数が減るのは当然のことかも知れない。県内における農用馬の飼養戸数・頭数と耕耘機等の所有台数の推移をみると

(図)、昭和30年代に耕耘機等(図中、青線)が急速に普及した結果、それまで農耕に使われていた馬の頭数(同、赤線)が急速に減少していったことが伺える。馬から機械への転換という点(機能性・効率性)と共に、その背後にある産業スタイル・価値観(共生・文化)等にも目を向けた検討が必要かも知れない。飼養目的のうち使役目的が少なくなっていく中で、他の目的(子取り生産や肥育)へと転換していったものと推定される。

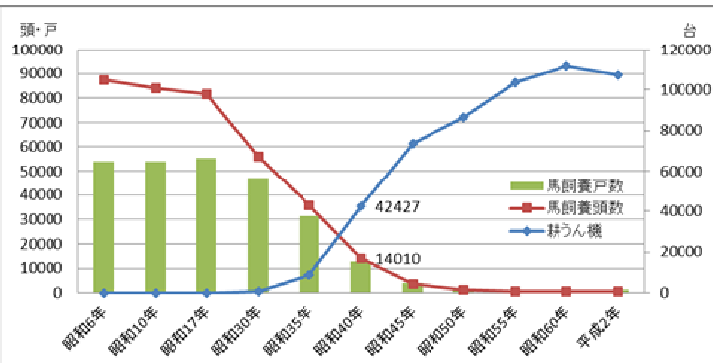


図 岩手県内における農用馬の飼養戸数・頭数と耕うん機等の所有台数の推移(昭和6年～平成2年)

馬事文化の性格の変化に目を向ける必要もある。例えば終戦直後は飼育頭数の減少に比例して装束馬も減少するが、昭和30年代には飼育頭数が減少を続けるにも関わらず装束馬の出頭数は増加を続ける。観光主体の祭り行事となったことが伺え、行政が主体となった保存会が出馬手当を拠出するなど奨励が背景にあったと思われる。調査過程で、馬は「経済動物」ではなくなったという声も耳にした。産業構造が大きく変化した現在、馬の肥育に向けた今日的意義や仕組みを創造していくことで馬数の確保と共に地域産業やライフスタイルへの提案・変革と連動させていくことも重要・有効ではないか

## ▼おわりに

馬に関する各分野・各主体の連携の必要性・有効性がある。従来、各分野が一同に会する機会がなかったようだ。また馬を題材にした福祉・教育・観光・商品など付加価値の可能性が大きい。そこには新しい世代・他地域との交流も必要・有効と思う。各情報収集に加えて具体の活動に向かいたい。

## ▼県内における新たな馬の活用の動き

左記状況の中で従来の馬産業・馬事文化の延長上あるいは別分野から新たな馬を活用した動きも登場してきている。馬ふん堆肥を活用したマッシュルーム栽培(企業組合八幡平地熱活用プロジェクト)、高原の貴重な財産である自然環境を次世代につなぐ保全・整備活動(安比高原ふるさと倶楽部)、馬搬の文化・技術の継承と共に木材のブランディングも狙う(遠野市・岩間氏)、古民家や地域の再生を馬の視点から描き出す(三陸駒舎)、など馬産業に付加価値を見出しているユニークで期待される活動が生まれてきている。これらの取り組み主体の多くが若い世代、特に30歳代というという点も注目されよう。



三陸駒舎／釜石市橋野地区の古民家を改修して活動が模索・展開される。各種活動と共に、地域住民、県内外各世代交流の場が育ちつつある。

## ▼馬を巡る県外の様々な素材

県内の状況・活動と同時に全国的な視野から馬・馬事文化を見つめることが、とりわけ情報・交通網が発達した今日において多様な効果の期待がある。近県で言えば、下北半島南部に存在した斗南藩による日本初の民間洋式牧場の開設があり本県の外山御料牧場にも影響を与えていると思われる。斗南藩を中心とした牧場経営が下北半島北部まで点在していることも興味深い。また同じく下北半島東端部、尻屋崎での寒立馬の放牧も興味深い。伝統馬の養育・普及という点は勿論、一般道にも重なる放牧地帯では馬と近くで触れることが出来、景観・観光・教育などの意義・効果もある。近江八幡市の賀茂神社は馬の神社として知られ、馬の聖地として全国の馬関係者が信仰と共に集うようだ。馬事博物館(岩沼市)、馬の博物館(横浜市)なども興味深い。



斗南藩記念観光村・先人記念館



馬の聖地・賀茂神社

# ～盛岡中心部で気持ちよく移動できる交通手段を～

平成27年度地域政策研究センター(地域提案型・前期)

課題名 : 盛岡市の中心市街地の活性化に寄与する交通まちづくりとLRTの導入  
 研究代表者 : 総合政策学部 講師 宇佐美誠史  
 課題提案者 : もりおか交通まちづくりLRTフォーラム 代表 戸舘弘幸  
 研究メンバー : 佐藤秀公、加藤勝、成島英史(もりおか交通まちづくりLRTフォーラム)  
 キーワード : LRT(Light Rail Transit)、中心市街地活性化、交通まちづくり

## ▼研究の概要

人口減少社会、ILCに向けて進んでいる中、県都盛岡市が来街者に魅力的な都市サービスを提供したい。

バス交通は30万都市にあって比較的便利な存在ではあるが、中心部での非効率運行や運転手の担い手の問題がある。

ILC誘致や台湾など海外からの観光客を増やしたり、生活者の利便性などを考えると、国際標準の公共交通機関であるLRT(次世代型路面電車システム)を代替案の一つとして検討してもよいのではないだろうか。



中の橋にLRT(CG)



バスとの乗り継ぎがスムーズ

### LRTの特徴

- ・輸送効率性  
一定の需要を一度に輸送できる、空間効率性も高い
- ・環境対応性  
1人あたりCO<sub>2</sub>排出量が少ない
- ・ユニバーサル性  
免許を有しない、足が不自由、来訪者、外国人等が利用しやすい
- ・街なかでの移動しやすさ  
駐車場を探す必要がない、飲酒ができる、低運賃など

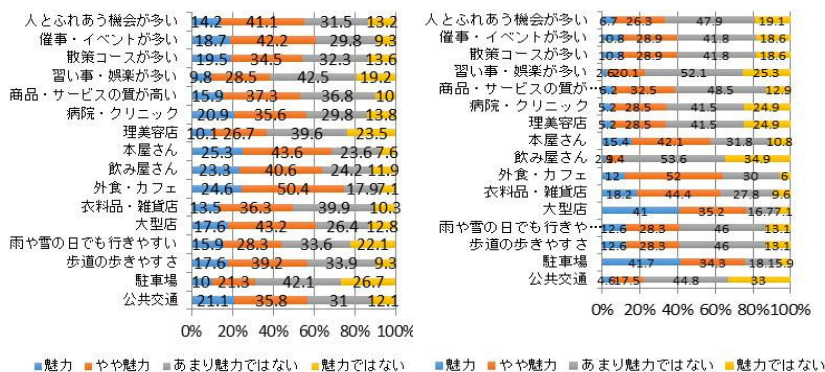


課題提案者作成のLRTマップ

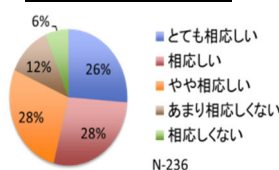
## ▼研究の内容

1. 盛岡市民対象に街の魅力を測るアンケートを実施
2. LRTや路面電車を有する20都市とそうでない県庁所在地の地価の推移を把握  
(地価は街の魅力と関係があると考えられ、市にとって独自財源の柱となる固定資産税の基となるため)
3. LRT整備を進めている宇都宮市長を迎えて公開討論会の実施

### 結果1 中心市街地(左)と郊外(右)の魅力の違い



### 結果2 盛岡にLRTは相応しいか



### 結果3 LRT等導入都市とそうでない県庁所在地の地価の比較(単位%)

価格比 H27/H20	1.0以上	0.9以上 1.0未満	0.8以上 0.9未満
県庁所在地	8.7	50.0	69.6
LRT等導入都市	10.0	60.0	75.0

## ▼研究の成果 (右の図表を参照)

1. 市民にとって、中心市街地は多様な魅力であるが、郊外部は大型店や駐車場が特に魅力と感じられている。
2. LRTが盛岡に相応しいと思っている人が多い。
3. LRT等導入都市の方が、地価の減少割合が少なく、都市の魅力向上に寄与している可能性がある。

## ▼おわりに(まとめ・今後の展開)

1. LRT導入のためには、中心市街地の交通体系を再構築する必要があるため相当な困難を伴うが、多様な魅力を持つ中心市街地の移動手段を強化することは、県都の健全な発展のために重要なことと思われる。今後は、これまでの活動、調査結果などを整理してPRし、協力者を増やしていくことが重要である。
2. 調査実施にあたり、アンケートにご協力いただいた方々に感謝申し上げます。

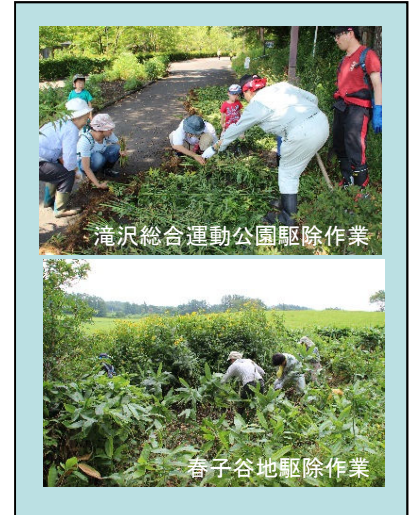
# ～外来生物オオハンゴンソウを発見し駆除する～

平成27年度地域政策研究センター（地域提案型・前期）

課題名：「市民参加による外来種オオハンゴンソウの分布調査・駆除に関する研究」  
研究代表者：総合政策学部 教授 渋谷 晃太郎  
課題提案者：たきざわ環境パートナー会議  
研究メンバー：高橋盛佳（滝沢環境パートナー会議）、島田 直明（総合政策学部）、  
阿部 昭博、富澤 浩樹（ソフトウェア情報学部）  
キーワード：外来生物 オオハンゴンソウ 市民参加 分布調査 駆除

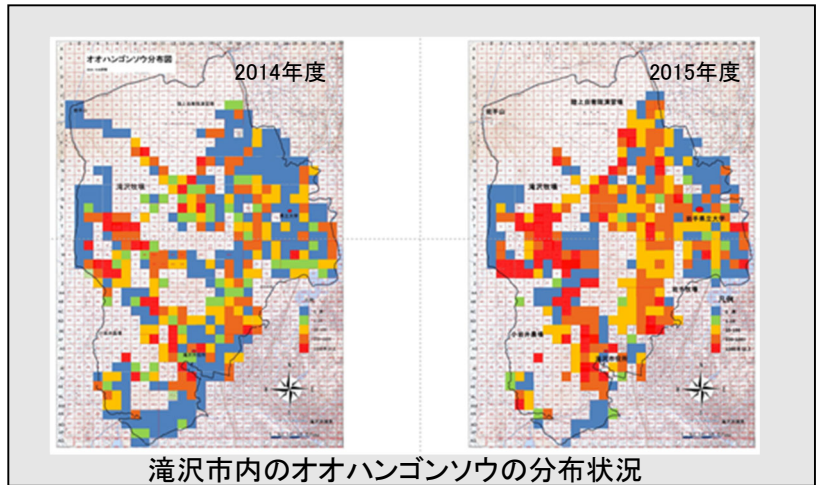
## ▼研究の概要（背景・目標）

滝沢市では、2014年度特定外来生物オオハンゴンソウの分布調査を市民参加により実施し、市内の多くの場所に侵入していることを明らかにした。参加した市民から早急に駆除を行うべきとの意見が出されたことから、分布調査を拡充するとともに駆除対策を実施した。



## ▼研究の内容（方法・経過）

1. 調査対象 特定外来生物オオハンゴンソウ
2. 調査内容 SNS、地図でオオハンゴンソウの分布を市民参加で調査する。小学生によるいきもの調査試行。駆除方法の検討及び実施。
3. 調査期間 8月～9月



滝沢市内のオオハンゴンソウの分布状況

## ▼研究の成果（結論・考察）

1. 分布調査 市内の多くの場所で分布が確認されオオハンゴンソウの出現箇所は増加傾向にある。
2. 小学生による調査 5校14人が参加。分布だけではなく土地利用などの調査を行った事例があり、今後の発展が期待された。
3. 駆除活動 駆除パンフレットを作成し、全戸回覧による市民啓発を行った。滝沢総合運動公園で駆除実験を行い、春子谷地湿原の周辺で本格的な駆除を実施した。



篠木小学校児童によるいきもの調査の事例

## ▼おわりに（まとめ・今後の展開）

1. 市民参加によるSNSや地図による外来種の分布調査は、県内でも先駆的な試みであり、今後他の市町村でも導入することが期待される。駆除のパンフレットについては、県の農業サイドで増刷され県内の農家に配布された。
2. 小学生によるいきもの調査は、小学生が身近ないきものに触れるきっかけとなるものであり、たきざわ環境パートナー会議が次年度以降も継続して行うこととなった。
3. 一度侵入してしまった外来種の駆除は労力やコストが高くつく。未然防止のための市民の啓発が肝要である。

# 薪ストーブのある暮らしとその利用者の交流

平成27年度地域政策研究センター(地域提案型・前期)

課題名 : 滝沢市における木質バイオマスの活用と里山管理に関する研究  
 研究代表者 : 総合政策学部 教授 渋谷晃太郎  
 課題提案者 : 有限会社 D' STYLE 橋本大治  
 研究メンバー : いわて森林インストラクター会、泉桂子(総合政策学部)  
 キーワード : 木質バイオマス、薪ストーブ、森林



## ▼研究の背景

かつて薪炭林であった森林(里山)は、現在利用の低迷によりその森林蓄積が増大している。一方、里山管理の担い手は減少し、県内各地の里山管理は不十分である。

滝沢市は、人口増加傾向にある自治体で、7,555haの森林(森林率41%)を持っている。今日、薪ストーブの利用者は都市部でも増加し、その薪の調達が課題となっている。そこで、薪ストーブ利用者が薪を地域の里山から調達することにより、里山の適切な管理、および安価な薪調達が可能にするシステムを考察する。



事例1 吉里吉里国の薪生産現場



事例2 薪ストーブユーザー向け講演会・WS

## ▼研究の目的

- 滝沢市内の薪供給量の推定: 優良な薪資源である広葉樹の面積および蓄積の概算
- 県内の先進的な薪生産者、薪ストーブ利用者のヒアリング: 薪の調達方法・その地域・薪価格・薪の流通単位・薪利用の利便性の向上に関する質疑
- 薪利用者が集う機会の提供: 薪及び薪ストーブの普及拡大のため、薪ストーブ利用者を対象としたワークショップの開催

c. ワークショップ形式で薪ストーブ利用に当たって生ずるさまざまな課題、それに対してどのように対応しているのかといったテーマで議論した。初心者から熟達者まで多様な薪ストーブユーザーが一堂に会することによって、初心者からは近隣関係や温度コントロールなどの悩みが出され、熟練者がそれにアドバイスを行うなど盛り上がりを見せた。残念ながら、薪の供給問題まで深めることはできなかったが、こうした交流の場を継続的に行うことで、薪の利用が促進される可能性が示唆された。

2016年2月11日 @岩手県立大学アイーナキャンパス

## ▼研究の成果

a. 理論的に、滝沢市の森林(民有林のみ)はおよそ56,760m<sup>3</sup>の木材を供給できる能力を持つ。滝沢市内22,000世帯で要する薪の量は概算で8万トンであり、計算上4割程度の需要が満たせるが、成長量すべてを薪とするのは非現実的である(下記③による試算)。

b. ①薪利用の促進のためには「少しの不便さを楽しみ」にすることが必要(NPO法人吉里吉里国:大槌町吉里吉里)

②薪ストーブがゲストとホストをつなぐ結節点になる。原発事故後、薪の直火調理や灰利用の楽しみが失われた(民宿フィールドノート:宮古市江繋)

③蓄熱タイプ薪ストーブを環境・利便性から推薦する(薪割りスト:花巻市大迫)

以上2015年9月7、8日聞き取り

【伐採可能面積】うち伐採可能で薪炭材に適するのは203ha(1割弱)

【伐採可能材積】森林の年間成長量10m<sup>3</sup>/haと仮定しても約56,000m<sup>3</sup>  
ただしこの数字は左記のような法的伐採禁止区域を考慮していない

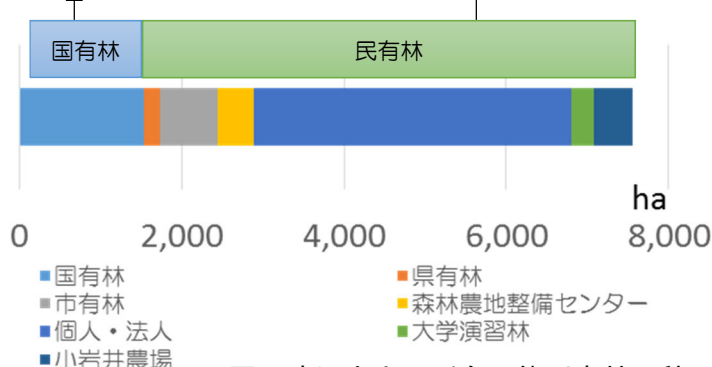


図 滝沢市内の所有形態別森林面積



# ～地域の「お宝」を次世代につなぐ～

平成27年地域政策研究センター(地域提案型・前期) 採択課題

課題名 : 持続的な地域づくりにおける「地域資源」の活用と住民の地域意識の形成過程  
研究代表者 : 総合政策学部 准教授 山田佳奈  
課題提案者 : 水分まちづくりの会  
研究メンバー : 平塚明(総合政策学部)  
キーワード : 地域づくり、一日博物館、「お宝」

## ▼研究の概要(背景・目標)

**【背景】** 岩手県紫波町水分地区においては、同町の事業を契機として平成24年に「水分まちづくりの会」が発足した。同会は夏祭りの復活や地域の「お宝」の発掘、昭和20年代の新聞記事を復刻した冊子や地域の郷土食をまとめた冊子の発行など、種々の実績を重ねてきた。

さらに、より恒常的な地区の交流の機会を目指し、同会は地域全体を「博物館」とする構想を立案した。この構想では、地域の歴史や伝統文化、潜在する「宝」を住民自身の手で掘り起こしながら次世代に継承し、またその活動の過程で地域の繋がりを深めていくことが目指された。「水分博物館設立実行委員会」も組織され、5テーマ(観光・食文化・歴史・イベント・自然)のチームが活動を進めた。

**【研究のねらい】** 長期的な視野のもと、一連の活動を通じた主体的・持続的な地域づくりの諸条件を探求することをねらいとした。特に、地域の活動プロセスを跡付けることにより、地域の自己認識をより深め、住民による自主的な活動が長期にわたって自己展開していくための諸条件の示唆を得ることが期待される。

## ▼研究の内容(方法・経過)

**【今年度の主な研究内容】** ①水分地区の環境・景観および食・食文化を中心とする生活史に関する基礎調査、②「水分まちづくりの会」の活動過程と住民の地域意識の把握

**【方法】** ①博物館準備の会合等への参加(参与観察)、②博物館運営に関わる先行事例および水分地区の歴史・自然・食文化に関する基礎調査・聞き取り、③博物館当日の運営への一部参加(学部学生と本研究メンバー2名)

**【経過】** 地区住民への呼びかけにより集まったお宝(約120点)を「お宝ガイドブック」にすべて掲載(コラムを研究メンバー2名が担当)し、「お宝マップ」の作製をイラストレータの方に依頼して作成し、この両方を水分地区の全戸および来場者や協力者・機関等に配布【写真1】。



【写真1】お宝ガイドブックとお宝マップ

### ◆「みずわけ湧くわく博物館」の開館(平成28年6月19日)

- ◎メイン会場「水分公民館」: 主に①「お宝」46点の展示、②田舎スイーツの体験・試食、③宮手鹿踊りの上演・水分小学校の鼓笛隊演奏、④水分の歴史に関する紙芝居・同会「歴史チーム」による発表
- ◎サブ会場「武田家住宅」(紫波町指定文化財): 武田家および「武田家を守る会」メンバーを中心に準備。来場者は水分地区の古地図の見学や田舎スイーツ・日本庭園の体験。



【写真2】ツアー時の様子(サブ会場の馬屋内部)

◎バスツアー: 午前・午後約2時間半ずつ実施。お宝の歴史ポイント(蜂神社・陣ヶ岡・武田家住宅・志和稲荷神社)をめぐる、紫波町の観光ボランティアと各ポイントでの説明者により解説【写真2】。



【写真3】お宝展示の様子(博物館当日のメイン会場)



【写真4】サブ会場の馬屋入り口(当日)

## ▼研究の成果(結論・考察)

この博物館は「一回限り」のイベントではなく、継続的な実施が当初より想定されている。そのため、特に今回の博物館の特徴として現時点で考えられる点を、数点のみ指摘する。

(1)開館準備や実際の開催という一連の過程を通して、「地域」(ローカル)と「個人」や「自分の家」(パーソナル)の「記憶」が再認識され、かつ再構成される場が醸成しつつあると考えられる。

【例: 地区の昔の祭りのビデオ上映】  
地域や自分の家族・親族の「記憶」の呼び起こし

→その場に集まった人々との共振  
→世代を超えた会話



【写真5】ビデオ上映(当日)

⇒「地区の記憶」の「次世代への継承」へ

(2)「お宝」がもつ具体的な「物語」は、個々の住民が何をお宝と考えるかという「主観的意味」と密接に結び付く。住民自身のお宝の選択という過程は、この博物館の持つ個性の一つとなろう。

他方、「地区外」からの参加者は、博物館への訪問者として見学する一方、「では自分の地域や家ではどうか」という自分の地域への振り返りが促される契機となりうる(参加者の声より)。

(3)博物館の運営: 同会にとって、各家から集められたお宝の整理や管理は初めての試みであった。しかし、それらの取り組みと同時に多様なイベントも行うという複雑な運営が可能になったのは、活動の積み重ねによる会の機動力と地域の「信頼関係」による結果ではないか。この点も、持続的な地域づくりのポイントの一つと考えられる。

## ▼おわりに(まとめ・今後の展開)

**【今後の展開・方向性として】** 他事例を参照しながら考察と分析を進める一方で、今回のお宝を手掛かりとした、調査の深化が考えられる(例: 地区の住民自身による探求/各領域の専門家が随時加わりながら複合的な視点で行う探求、など)。

⇒各々の立場から地域の「お宝」の掘り起こしと探求を行うなかで、内外の相互作用が、「地域に対する認識の深化・再構成」と「地域への愛着形成の促進」に寄与することが期待される。

**【謝辞】** 水分地区の皆様や聞き取り・アンケートにご協力いただいた皆様、資料収集にあたりご協力いただいた羽咋市立図書館の皆様にご感謝申し上げます。

### 【参考文献】

- ・塚原正彦、2016、『みんなのミュージアム 博物館・図書館未来学』、日本地域社会研究所
- ・羽咋市チャンピオン協会、1986、『羽咋ギネスブック』Vol. 1

# ～障がい者のアートは「いわての文化」になりえるか～

平成27年地域政策研究センター(地域提案型・前期) 採択課題

平成27年度地域政策研究センター(地域提案型・前期)

課題名：芸術活動を通じた障がい者の生きがいづくり  
—障がい者の社会参加を促進する公募展のあり方について—  
研究代表者：社会福祉学部 准教授 佐藤匡仁  
課題提案者：いわて・きららアート協会 事務局 村井資  
キーワード：障がい者、芸術活動、支援の促進・阻害要因

## ▼研究の概要(背景・目標)

本研究は、いわて・きららアート協会事務局、村井資氏からの提案により、“芸術活動=非生産的な遊び”と認識されがちな障がい者の芸術活動支援について、福祉事業所及び特別支援学校を対象とした意識調査を行い、支援の阻害要因と促進要因を抽出し、得られた知見を公募展企画等の運営計画に改善点として反映させること、また、芸術活動支援の理解と促進に結びつけ、岩手県の障がい者芸術支援をいっそう盛んにする手立てを検討することが目的である。

## ▼研究の内容(方法・経過)

1. 岩手県内の福祉事業所及び特別支援学校を対象とする質問紙による悉皆調査

岩手県内全ての福祉事業所(292箇所)及び特別支援学校(16校)、計308箇所を対象に質問紙調査を実施した。調査結果から、障がい者の芸術活動支援についての理解・認識や課題について抽出するとともに、分析・検討を行った。

2. 特色ある改善に必要な方法について福祉事業所及び特別支援学校を対象とするヒアリング調査

取り組みの顕著な福祉事業所や特別支援学校、あるいは関心が示されない事業所や学校等を対象にヒアリング調査を実施し、質問紙で掬いきれないニーズについて分析・検討を行った。

## ▼研究の成果(結論・考察)

1. 岩手県における福祉事業所・特別支援学校の87箇所(64.44%)は芸術活動支援に取り組む。絵70箇所(80.46%)、歌45箇所(51.72%)、書道39箇所(44.83%)と続く(Table1・2)。

2. 芸術活動支援のない48箇所(35.56%)のうち、取り組まない理由は、「生産活動が優先されるので、芸術活動にまで取り組む余裕がない」32箇所(66.67%)、「いずれやってみたくも思っているが取り組めずにいる」11箇所(22.92%)、「利用者・児童生徒に関心が見られないので、特に取り組んでいない」10箇所(20.83%)と続く(Table3)。

3. 芸術活動支援を始めるための条件として、「研修会で、制作支援によって利用者がどのように変化し、成果を得られたかを学びたい(事例)」45箇所(33.33%)、「地元で展示・発表の機会がたくさんあればよい」41箇所(30.37%)、「専門家が事業所に来て、支援の仕方を教えてほしい」35箇所(25.93%)と続く(Table4)。

4. 静山園、ハックの家、ウィリー等の事業所でヒアリングを行った。共通点として、制作者本人の表現自体を最大限尊重し、支援者はむしろ“魅せかた”の工夫を援助していることが示唆された(Figure3・4・5・6)。

## ▼おわりに(まとめ・今後の展開)

1. 支援開始条件の上位項目には、協会がすでに取り組むものもあった。一つ一つの要望に対し、協会側が準備・提供可能かどうかを照応させて、公募展企画等の運営計画に反映させていく。

2. 調査にご協力いただいた岩手県内の福祉事業所・特別支援学校に、記して感謝の意を表す。

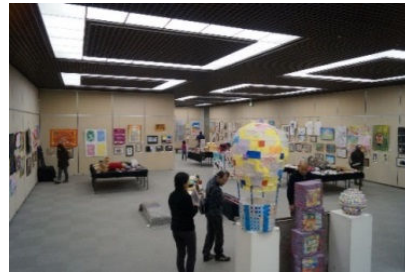


Figure 1 第19回いわて・きららアート・コレクションの様子



Figure 2 第19回大賞作品



Figure 3 静山園の制作者の入賞作品

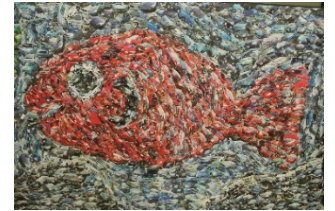


Figure 4 ウィリーの制作者の出品作品



Figure 5 ハックの家の制作者の制作活動の様子



Figure 6 作品が製品化されたバック(ハックの家)

Table 1 芸術活動の有無

	箇所	%
はい	87	64.44
いいえ	48	35.56
		n=135

Table 3 芸術活動支援に取り組まない理由

理由	箇所	%
生産活動優先で余裕なし	32	66.67
いずれと思うが取り組めず	11	22.92
本人に関心がない	10	20.83
サークル等で行うこと	2	4.17
生きる上で必ずしも必要ない	2	4.17
長けた職員がいない	2	4.17
その他	11	22.92
複数回答可		n=48

Table 2 取り組んでいる芸術活動

芸術活動	箇所	%
絵	70	80.46
歌	45	51.72
書道	39	44.83
楽器	26	29.89
ダンス	26	29.89
刺繍	24	27.59
木工	19	21.84
写真	17	19.54
陶芸	12	13.79
俳句	5	5.75
作詞	2	2.30
その他	24	27.59
複数回答可		n=87

Table 4 芸術活動支援を始めるために必要な条件

条件	箇所	%
制作支援による利用者の変化・成果を知る	45	33.33
地元での展示・発表機会の増加	41	30.37
専門家の訪問による支援方法の教示	35	25.93
画材の選び方や額装の仕方など技術的なこと	28	20.74
作品制作の機会や場所の提供	25	18.52
制作支援のマニュアルやガイド	24	17.78
制作支援の相談窓口	23	17.04
商品製作・販路開拓など収益を上げる方法	20	14.82
都会や海外での展示・発表機会の増加	3	2.22
その他	9	6.67
複数回答可		n=135

# ～目指せ農業者支援！工業都市北上のチャレンジ～

平成27年地域政策研究センター(地域提案型・前期) 採択課題

課題名 : 農業中間支援組織構築に向けた中核生産者の果たす役割  
 研究代表者 : 高等教育推進センター 准教授 劉文静  
 課題提案者 : 北上市農林農業振興課 小田島駿雄  
 キーワード : 農業者支援組織、中核農業経営者、農業振興、農地集積、農業法人化

## ▼研究の概要(背景・目標)

北上市では「農業者をサポートする中間支援体制」を確立しようとしている。本研究では、組織づくりと組織の発展を目指し、以下の項目の明確化を目的とする。

- 求められる機能や組織体制
- 農業諸団体の機能や組織間連携の在り方
- 地域の中核生産者の果たしうる役割

## ▼研究の内容(方法・経過)

「中核農業経営体」「農協」「既存の農業支援組織」を対象に聞き取り調査を行う。



図1 調査風景

## ▼研究の成果(結論・考察)

『「農業支援」も重要であるが、やはり「農業者支援」にするべき』と北上市に提言することが決定した。今後は、農業者にとって支援を受けやすい仕組みや、支援側にとっても支援しやすい構造を構築していく。

表1 聞き取り調査した中核農業経営者の特徴

農業経営者	経営形態	経営面積	農協利用	雇用状況	農業支援への要望・参加意欲	農地集積	法人化の歴史
M農家	1戸1法人の専業農家	小菊、多品目野菜(稲作中止)	小菊:農協 野菜:独自	正規4人+ 複数臨時雇用	販売組織、冷蔵施設	田圃から畑作に転換	2014年法人化
T1農家	専業農家	多品目野菜、 稲作(減らす方向)	直売、産直など	バイトを雇用	販路拡大	畑地拡大、自ら集積	法人化をめざす
SH農家	専業農家 +冬場バイト	稲作、リンゴ	主に農協経由	家族農業	農政により経営計画を立てるのが難しい	現状維持	集落営農から脱落
T2農家	専業農家	主に稲作	6割農協+産直	家族農業	新規就農者に園芸かつ販売先のパッケージ提案が必要	規模拡大志向	5年先に法人化
Y法人	1戸1法人	稲作、 ネギなど野菜	農協95%+産直	複数臨時雇用	税理関係、正規雇用の課題	自ら農地集積	2013年法人化
F法人	農事組合法人 (集落ぐるみ型)	水稻、小麦、大豆	農協経由	2名常時+ 構成員の臨時作業	経理など	66ha→97ha拡大	2015年法人化
YOO 集落営農	3集落による生産組合から広域 農事組合法人の一部に	水稻、そば、小麦 など	農協経由	集落営農 雇用なし	販路開拓、 水利整備の困難等	3集落の集積からさらに広域農 事組合法人として集積	2010年集落協定 2014年広域法人化

稲作専業以外は稲作を減らしている

関連組織間の連携サポートが求められている

集積化が進行  
自ら集積するケースが多い

法人化が進行

表2 北上市農業農家の概況(5年間の比較)

注:センサスにより作成

	岩手県と北上市は同じ傾向がある	農家数	自給的農家	販売農家	経営耕地 5~10aの世帯 (農家世帯を除く)	耕地及び耕作放棄地を 5a以上所有している世帯	1世帯複数 経営
岩手県	2015年	65,711	20,903	44,808	6,505	33,045	762
	2010年	76,377	21,030	55,347	6,739	27,445	
	増減率	14%	0.6%	19%	3.5%	増加20.4%	
北上市	2015年	3,878	1,170	2,780	422	2,919	16
	2010年	4,446	1,140	3,340	293	1,947	
	増減率	12.8%	2.5%	18%	増加44%	増加49.9%	

増加

減少

集積化が加速

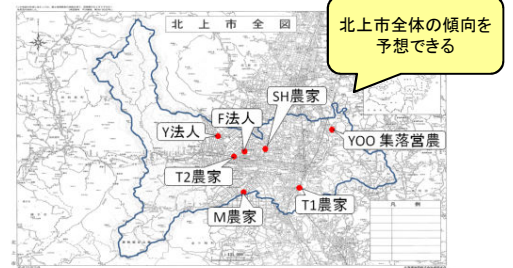


図2 調査した中核農業経営体の北上市における位置

## ▼おわりに(まとめ・今後の展開)

北上市全体の農業構造を明確化し、地域内にある様々な名称の農業や農業者支援組織の機能と役割、および活動メンバーとかかわる団体について、明確な形での図式化を通じて可視化を図ることが今後の課題となる。今後は支援組織の地域農業、とくに地域の農業者支援への貢献についても検証していく必要がある。

【謝辞】北上市農林部農林農業振興課・企画課をはじめ、農業委員会、市内の農家の方々、農業法人の方々、農協および農業関連組織の方々に、ご多忙中、快く聞き取り調査に応じてくださったことに対して心より感謝申し上げます。

# ～沿岸地域の交通網整備が地域経済にもたらす効果～

平成27年度地域政策研究センター(地域提案型・前期)

課題名：三陸沿岸道路及び三陸鉄道開通に伴う地域経済への影響と活用策  
 研究代表者：総合政策学部 教授 山本健  
 課題提案者：岩手県沿岸広域振興局  
 研究メンバー：熊谷正則(岩手県沿岸広域振興局)  
 技術キーワード：震災復興、三陸沿岸道路、産業・観光振興

## ▼研究の概要(背景・目標)

高規格道路整備によって、沿岸部主要都市間の時間距離は大幅に短縮されることが予想される。開通を機に、企業の新たな事業展開、地域課題の解決が期待されている。本研究は、そうした期待や懸念の実態を把握し、適切な施策立案に資する基礎的情報を得るために実施された。

## ▼研究の内容(方法・経過)

1. 調査対象 沿岸地域で被災した2,060(ほぼ全数)の事業所(952件、46.2%の回収)
2. 調査内容 アンケート調査、インタビュー調査(6事業所)
3. 調査期間 2015年11月～2016年3月
4. 調査方法 郵送、訪問による聞き取り

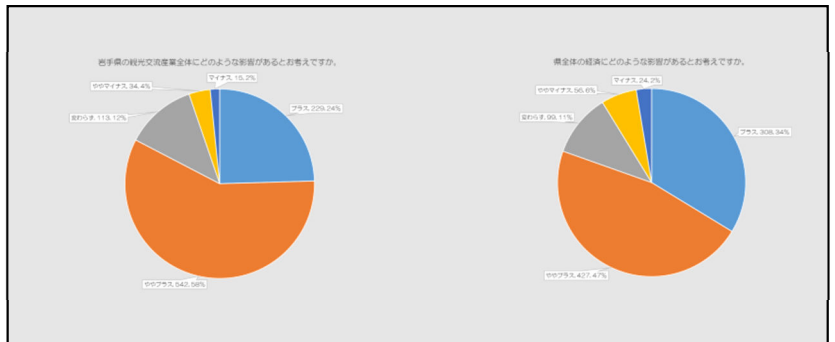
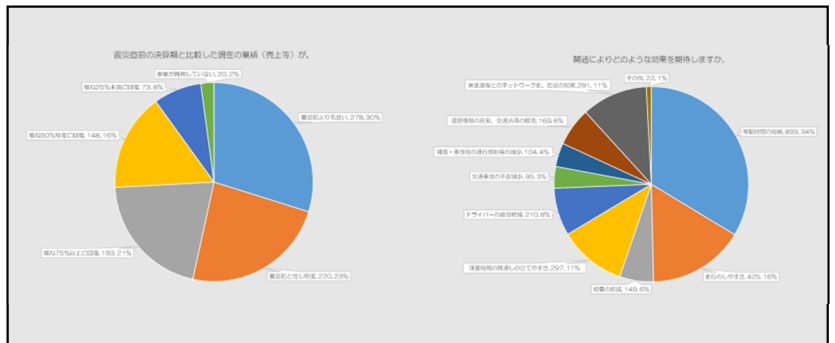
## ▼研究の成果(アンケート)

1. 53%の事業所が「業績は震災前以上」
2. 期待される効果は①時短、②走行のしやすさ、③見通しの立てやすさ
3. 訪問客数、のべ滞在時間は増加を期待。一人あたり滞在日数は短縮を懸念。
4. 81%が県経済にとってプラスと回答



## 時間短縮効果の例

宮古-大船渡	110 → 85
宮古-八戸	180 → 120
宮古-仙台	300 → 180
宮古-久慈	105 → 70
宮古-盛岡	105 → 90
花巻-釜石	110 → 80
北上-釜石	110 → 75
八戸-仙台	480 → 300



## ▼研究の成果(インタビュー)

1. 人手不足の解消で稼働率アップ見込む
2. 内陸部からの誘客増、近隣との連携に期待
3. 運転手の負担軽減、安全性の向上に期待
4. 従業員の通勤時間短縮、通勤圏の拡大
5. 取扱品目の多様化が可能になる
6. 求人票を出せるエリアが拡大する

## ▼おわりに(まとめ・今後の展開)

1. 単純集計による調査結果を各市町村の職員に提供し、地域や産業に特有の課題の発見と検討につなげたい
2. 産業振興や観光振興等の施策立案のための利活用を促したい
3. 調査実施にあたり、ご回答いただいた事業所、ご提案に始まり、厚いご協力をいただいた沿岸振興局のみなさまに感謝申し上げます(謝辞)

# ～きてけて田野畑～番屋地区の活性化～

平成27年地域政策研究センター(地域提案型・前期) 採択課題

課題名：震災復興と地域活性化-机浜番屋群を拠点とした地域振興策の検討を中心として-  
研究代表者：総合政策学部 教授 田島平伸  
課題提案者：田野畑村 NPO法人体験村・たのはたネットワーク  
研究メンバー：田野畑村職員、特定非営利法人体験村・たのはたネットワーク、  
齋藤俊明(総合政策学部)、田島ゼミ3年生(秋田谷亮、阿部哲士、小原りら、  
久保秀吉、野口英慈)  
技術キーワード：ジオストーリー、ジオツアー、持続的地域活性化

## ●研究の概要

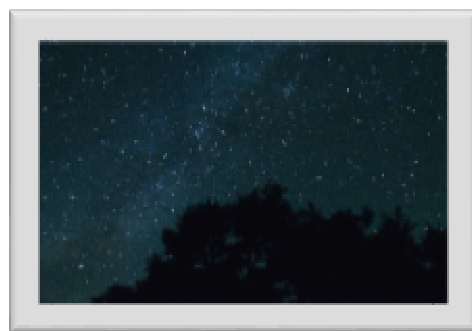
本調査研究は、岩手県田野畑村の机浜番屋群やその周辺地域について、新たな資源の発掘、開発を目的として行われたものである。

調査研究の目標は、①番屋施設をはじめ、周辺地域にも目を向けた資源の調査・発掘・開発によるメニューの提案、②塩づくり番屋で生産される塩の活用方法及び製品化の提案、③滞在時間の長時間化に向けた提案、④教育機関等の利活用方法及び交流の拡大への提案、の4つである。

## ●研究の内容

1. ポストカード・カレンダーの作成と活用の検討
2. わかめをはじめとする観光資源についてのパンフレット作成と活用の検討
3. 田野畑村の塩を他地域と差別化し販売するための商品化に向けた実験と検討
4. 滞在時間の延長と観光のバリエーション拡大のためにダイビングの可能性の検討
5. トレッキング利用者拡大に向けた、安全対策と地域資源活用の調査と検討

全体：地域資源を生かした滞在型観光を拡大することで観光客の増大を図ることを目的に地域資源について分野ごとに活用の可能性を検討



ポストカード写真(例)



海岸のゴミが地域に積もる課題の多さを表す...



制作したトレッキングマップ

## ●まとめ(研究の成果と今後の展開)

- ・平成28年3月5日「地域づくりフォーラムinたのはた」において調査結果を報告
- ・調査成果の事業化についての検討や新たな地域協働の取り組みに向けた活動を今後も行う予定
- ・調査実施にあたり、ご協力いただいた田野畑村の皆さんに感謝申し上げます。